

## 二種の因果効力

—— *sāmānyā śakti* と *pratiniyatā śakti* ——

稲 見 正 浩

序 ダルマキールティとその後継者たちは実在を因果効力 (*arthakriyāśakti*) をもつものと定義するが、彼らがこの因果効力に関して二種的能力, *sāmānyā śakti* と *pratiniyatā śakti*, に言及することがこれまでの研究 (神子上 1978, 1979; 桂 1983, 2002 等) によって報告されている。それらの研究では、この二つの因果効力は、例えば、壺という実在がもつ、水などを保持する能力 (= 普遍的能力) と視覚知などの感覚知を生ぜしめる能力 (= 特殊的能力) と理解されている。そして、前者は連続体 (相続) としての壺がもつ、他の壺と共通する能力と、後者は瞬間的な存在としての壺がもつ、それ以外のすべてのものと共通しない固有の能力と考えられている。また、一部の研究はこの二つの因果効力の概念をダルマキールティではなく、プラジュニャーカラグプタに帰している。

しかし、ダルマキールティなどにとって、色などの構成要素とは別に存在すると認められない壺に果たして因果効力があるのか。また、概念的虚構である連続体などにも因果効力があるのか。さらに、ダルマキールティと注釈者達との間に見解の相違があるのか。本稿の目的はこの二種の因果効力がそれぞれ何を意味するのか、彼らの記述を再検討することにある。

**PV II** まず、先行研究の主たる考察対象ともなっている PV II の議論について検討する。ダルマキールティは輪廻の論証 (PV II 34b-119) の流れの中で、全体 (*avayavin*) 批判を展開している (PV II 84-102) が、この〈全体〉批判の傍論で二種的能力に関する議論が提示される。彼にとっては、例えば壺は色などの集合体であり、その色などとは別に単一の壺は存在しない。彼はこれに関して、『壺の色など』 (*ghaṭasya rūpādayaḥ*) という差異表現がある以上、壺と色などが別々に存在するはずである」という反論を想定し、PV II 100-102 でこれに答える。色などとは別に壺が存在しなくてもこのような言語表現は説明可能であることを彼は以下のように論じている。

「壺を構成する」色などの「諸原子の、色の諸原子なら視覚知を生ぜしめるなどという」諸々の個別の能力（śaktibhedāḥ）を含意せずに、それら（壺を構成する色など）の「全体に」共通する結果（例えば、水の保持など）の原因ではないものの排除（tatsamāna-phalāhetuvyavaccheda）に対して、「壺」（ghaṭa）という語ははたらく。だから、「色である壺（rūpaṃ ghaṭaḥ）」という同一基体表現（同格表現）はない。（PV II 100-101ab）「壺の色など（rūpādayo ghaṭasya）」と「いう所属関係を述べる表現によって」、それ（色など）の「一つの結果を生み出すという」共通性／それ（色など）の総体（tatsamānya）を制限的副次要素（upasarjana）とする、それ（色など）の諸々の個別の能力（tacchaktibhedāḥ）が述べられる。（PV II 102a-c）

「壺」などと呼ばれる物は色などの複数の原子の集合体であり、これらとは別に単一の壺はない。「壺」という語は、部分とは別の単一の全体を指示するのではなく、その複数の原子の集合体に共通する、水の保持などという一つの結果、その原因でないものの排除に対してはたらく。ここで述べられる「共通する結果」とは、複数の壺に共通する結果という意味ではなく、一つの壺を構成する色などの複数の要素すべてに共通する一つの結果のことである。

また、壺を構成するこの色などの諸要素はそれぞれ固有の結果を生み出す個別の能力ももっている。例えば、色は視覚知を生ぜしめ、香りは嗅覚知を生ぜしめるといった特有の能力をそれぞれもっている。これが「色」などの語で表示される。「壺」という語が用いられるとき、この個別の能力は含意されないで、「色である壺」という同格表現はなされない。それゆえ、「壺の色など」と差異を表す属格表現がなされるのである。すなわち、「壺の色など」という表現がなされるのは、「壺」と「色など」という二つの語の指示対象である壺と色などが別々に存在するからではない。指示対象は色などしかないが、二語によって表示されるその内容が異なり、しかも一方によって他方が含意されないからである。

**PV II の注釈** 注釈者デーヴェーンンドラブッディは共通の能力（\*sāmānyā śakti）とそれぞれ固有の能力（\*pratiniyatā śakti それぞれ決まった能力）という二つの能力でこのダルマキールティの言明を説明している。

色などの能力は二種である。[すなわち、共通の能力と固有の能力である。このうち、] 共通の「能力」とは例えば、壺の形態をもつ「色など」の、水などを保持することなどという結果を生み出す能力のことである。[一方、] 固有の「能力」とは例えば、視覚知などという結果を生み出す能力のことである。…（中略）…実体は多数存在するが、それらの色などにある〈水などの保持〉などという結果の原因ではないもの、すなわち、木など、を排除するために、[「壺」という語は] はたらく。どうしてかということ、一つの結果を生み出す能力があることを説くために、そのように言語協約がなされているから

である。そして、[壺を構成している] 色などの多数のものに対して、単一の能力があることを述べようと望んで、言語契約にしたがって、「壺」という単数形が[述べられるので、複数のものに対する単数表現に] 矛盾はないのである。(PVP D44b1-5, P50a5-b2)

この二つの能力は壺がもつものではなく、色などがもつものである。壺を構成している、すなわち、壺という形態をとった、色などには共通の能力と固有の能力がある。前者は水などの保持という構成物全体に共通する一つの結果を生み出す能力のことであり、他の壺と共通する結果を生み出す能力でもなければ、壺という連続体がもつ能力でもない。また、後者は色なら視覚知を、香りなら嗅覚知を生ぜしめるという構成物のそれぞれに特有の結果を生み出す能力のことであり、瞬間の壺が自身の知覚知を生ぜしめる能力などではない。

このデーヴェーンドラブッディ注の一部はジャイナ教のハリバドラスーリ (8世紀頃) の *Anekāntajayapatākā* に仏教説として引用されているものとほぼ同じ文章である (Ed. H. R. Kapadia, Vol. II, 36, 6-9)。また、ラヴィグプタ注 (PVV (R) D341b7, P195b3) や PVV に対するヴィブーティチャンドラの注記中 (Vibh p. 48, fn. 1) にも類似した記述がある。この *sāmānyā śakti* と *pratiniyatā śakti* という名称／概念は、一部の研究ではプラジュニャーカラグプタに帰せられているが、既にデーヴェーンドラブッディ注に見られるものである。

共通の能力とは複数の壺に共通の能力のことではなく、壺を構成する色などの要素が集合体としてもつ能力のことであることは、プラジュニャーカラグプタがこれを *samudāyaśakti* と呼ぶことから明白である (PVA 98, 13-17)。また、固有の能力も、シャーキャブッディが詳説するように、その色などの構成要素がそれぞれ個別にもつ特有の因果効力、例えば色なら視覚知を、香りなら嗅覚知を生ぜしめる能力のことである (PVT D110b6-7, P135a7-8)。

これらの注釈者達の理解によれば、ダルマキールティはここで、部分とは別の単一な全体の存在を認めずに、語の適用根拠の違いを部分がもつ二つの因果効力でもって説明しているとみなせよう。すなわち、壺を構成している色などには共通の能力と固有の能力があり、その能力に応じて「壺」「色など」の語が使用されると彼は説いていることになる。

**ダルマキールティの他作品** 次に、この二つの能力の概念が PV II 以外のダルマキールティの作品に見てとれるか検証したい。まず、PV I とその自注 PVS V では、複数のものが一つの語によって表現される代表的なものとして集合体、連続体、特定の状態の三つが言及されるが、そのうち集合体について壺の例で次の

ように説明されている。壺は色・香り・味などの複数のものからなる複合体であるが、全体で水の保持などの一つの結果をもたらす。その複数の構成要素は一つの結果をもたらす点で違いがないので、それらに対して「壺」という単一の語が使用される。ある特定の壺を形成する色などはそれぞれ同類からも異類からも区別された複数のものであるが、共通に特定の液体保持能力等をもつので、それをもたない布などから区別されて「壺」などと呼ばれる。「壺の色など」という表現も、液体保持能力等をもった色などという意味である。壺の色などには他の布の色などと共通した目的実現能力（視覚知を生ぜしめること等）があるが、「壺の」と述べられることで、液体保持能力等をもったものに限定される（PVSV 68, 7-18）。ここで説かれている内容は先に見た PV II とその注釈の説明とほぼ同じである。

HB では、原因総体から単一の結果が生じる場合の原因の因果効力について、壺の製作の例で説明されている。粘土や陶工などの複数の原因は相互に協力して一つの結果である壺を生み出す。しかし、同時にそれらの原因は個々に特有の結果をもたらす能力を持っている。すなわち、粘土は粘土製のものであるという結果の特殊性に、陶工は壺の特定の形という特殊性に、糸はろくろではなく糸によるものであるという特殊性に寄与する。これら複数の原因は、全体で一つの結果を生み出すが、それぞれ対象領域の異なる、固有の能力をもっている（HB 9, 13-10, 4）。これと同様のことは視覚知の生起の例でも説明される（HB 10, 19-11, 9）。また、壺を構成している色などは複数であるが、一緒に一つの結果を生み出すので「壺」という単数の語が用いられることは VN でも言及される（VN 6, 19-7, 4）。

以上のように、原因総体を構成する諸原因は、全体に共通する一つの結果を生み出す能力と、それぞれ特有の結果を生み出す能力との両方をもつということは、ダルマキールティが一貫して主張しているものである。この概念をプラジュニャーカラグプタのものとする一部の先行研究は訂正されるべきである。

**集合体を表示する語と類を表示する語** 「壺」という語は、他の壺と共通する能力を表示する語とも確かに解釈できる。ダルマキールティも PV II の議論で類を表示する語 (*jātiśabda*) にも言及し、これと集合体を表示する語 (*samudāyaśabda*) との両者には区別があることを説いている。

そして、[他のものを無視するかしないかの] この区別は、類を表示する語と集合体を表示する語の間にも認められる。（PV II 101cd）

デーヴェーンドラブッディ（PVP D44b6-45a5, P50b3-51a3）などの説明によれば、「壺」という語は、その構成部分である色などに照らして用いられるときには集合体を

表示する語となり、構成物が全体で共通にもつ、水の保持などの一つの能力を表示する。一方、個物である特定の壺（特定の色などの集合体）に照らして、そして、木や布などの別の個物（集合体）に対比して用いられるときには、類を表示する語となり、複数の壺が共通にもつ、水の保持などの能力を表示することになる。ただし、この両者には区別がある。集合体を表示する語はその構成物それぞれの固有の能力は含意しないので、例えば「色などである壺」(rūpādayo ghaṭaḥ) という同格表現はなく、「壺の色など」(rūpādayo ghaṭasya) などという差異表現がなされる。一方、類を表示する語はその類に属する特定の個物（のもつ能力）も含意するので、例えば「シンシャパーという木」(śiṃśapā vṛkṣaḥ) という同格表現がある。

共通の能力という場合、1) 集合体として一つの結果を生ぜしめるという点でその構成要素が共有する能力と、2) 集合体をもつ、他の集合体と共通の能力、とが考えられる。しかし、1) の能力の場合は生じる結果が一つであるのに対し、2) の能力の場合は結果は集合体ごとに異なる複数のものであり、厳密には同じものではない。その点では2) の共通性はあくまでも概念的虚構にすぎない。

**一つの認識が多数のものを対象とすること** 色などの固有の能力は、色の原子は視覚知を、香りの原子は嗅覚知を生ぜしめることであるが、色や香りの原子は単独で、あるいはばらばらの状態で視覚知や嗅覚知を生み出すことはない。それらも集合してはじめて視覚知などの原因となる。すなわち、集合した複数の色の原子は単一の視覚知という結果を生み出す点では共通の能力をもつ。

この複数の原子がもつ共通性についてはディグナーガも PS(V) I 4cd において言及している (Hattori 1968: 26–27, 88–91; 戸崎 1979: 294–298 などを参照)。複数の原子の集合体を一つの知覚知が認識する場合、複数のものを一つとして認識するその知は概念的構想 (kalpanā/vikalpa 分別) であって、「概念的構想のない認識」という知覚の定義と矛盾するのではないか、というアビダルマ論書でも論じられている問題がそこで取り扱われている。ディグナーガの答えは、多数の原子から単一の感官知が生じるから、その知は共通のもの (sāmānya) を対象とするといわれるのであって、多数のものを単一のものとして概念構想するからではない、というものである。ここで彼は、複数の対象から直接一つの感官知が生じるケースと複数の対象を概念的判断を介して一つとみなすケースとを峻別するが、前者の複数の対象も「共通のもの」(sāmānya) と呼びうることを認めている。これはダルマキールティが説く〈共通の因果効力〉の因果モデルと基本的に同じである。

また、ディグナーガはアビダルマの伝統 (AKBh<sup>1</sup> 7, 20–21 = AKBh<sup>2</sup> 7, 22–24; 『大毘婆

沙論』655a26-b7等を参照）にしたがい、色などの複数の原子は処の独自相（āyatana-svalakṣaṇa 処自相）に照らせば独自相であることにも言及する。処の独自相とは、視覚知の対象であって聴覚知の対象ではないなどというように、あるいは、色であって音ではないなどというように他の処から区別されたもののことである。色の複数の原子は視覚知を生ぜしめるという点で独自性をもつというこのディグナーガの説明に、ダルマキールティの説く〈個別の因果効力〉との共通性を見いだすことも可能である。

**結び** 今回の検討の結果、以下のことが明らかになった。1) 二種の因果効力は壺などを構成している色などの要素がもつ能力のことである。2) 共通の能力とは複数のものが集合して協力して一つの結果を生みだす能力、すなわち、集合体の構成要素すべてが共有する能力のことである。一方、固有の能力とは、この原因集合に含まれる個々のものがそれぞれ別個に特有の結果を生みだす能力のことである。3) 共通の能力は別の集合体と共通した能力という意味ももちうるが、むしろ一つの集合体を構成している個々の要素が全体で共有する一つの能力として理解されている。4) 色などの原子が集合して一つの感覚知を生ぜしめる能力も共通の能力とみなしうる。5) 二種の因果効力の概念はダルマキールティが一貫して説いているものである。その発想はディグナーガ、さらにはアビダルマの議論まで遡れる。

二種の因果効力は、部分以外に単一の全体が存在することを認めずに、部分がもつ二つの能力で語の適用根拠の違いを説明したものである。言葉の多様性の根拠は多様な実在の存在ではなく、実在のもつ因果効力の多様性であるとダルマキールティとその後継者達はここでみなしていると思われる。ただし、この対応関係も絶対的なものではなく、あくまでも、人間の願望・意欲にもとづく協約の上で成立しているものでしかないと彼らも意識していたことは言うまでもない。以上は概念や言葉と因果的な実在の世界とのある種の関連性を一応認めた上でなされた議論にすぎない。

---

本稿は拙論「存在論—存在と因果」（『シリーズ大乘仏教9 認識論と論理学』春秋社、2012年）注（10）で「別稿を準備中」と言及したものである。略号・参考文献は同論文に準拠する。なお、紙幅の都合で口頭発表時の内容を大幅に削減せざるをえなかった。資料等の詳細は今後発表予定のPV II 86cd-102と注釈文献の翻訳研究を参照されたい。

〈キーワード〉 ダルマキールティ、因果効力、能力, *sāmānyā śakti*, *pratinīyatā śakti*  
 （東京学芸大学教授、博士（文学））